

今日は主イエスが語られた有名な「タラントのたとえ話」の箇所から神様のみこころを教えられたいと願っています。この話はたとえ話の中でも最後の方でここで私としては話されたものです。最後の方とは主イエスが十字架におかかりになるすぐ前のことであり、この箇所も最初に「天の御国は」と言われているのも天国を前にした地上での人の歩みのことを教えています。

話はこうです。ある裕福な主人が旅に出るにあたって、3人のしもべを呼び、自分の財産を5タラント、2タラント、1タラントそれぞれ3人に預けました。タラントとは当時の貨幣単位であり、しかも土地や商売のような時に出てくるもので普通の日常生活で用いる単位ではありませんでした。才能、能力まあ今は芸能人を表わすタレントという言葉はこのタラントから来ています。1タラントは6000デナリになりますから5タラントとは80年分の給与となり、一生何もしないで十分いきでゆける額です。ずいぶん年月が経って主人は帰ってきてからその3人と清算しました。5タラント預かった者はさらに5タラントもうけ、2タラント預かったものは2タラントもうけたのです。つまり預かったお金を倍にしたのです。主人は大喜びです。しかしもう一人の1タラント預かった者は地面に埋めておき、主人が清算した時にそっくり1タラント持ってきたというのです。そして5タラント、2タラント儲けた者を主人は喜び、埋めた1タラントを差し出した者は対照的に自分のお金を取り上げられて他の10タラントになった者にあげるようになったという話です。

3人に預けられたタラントつまり多額の財産が用いられてどうなったのかということがこの話のテーマですがこの箇所から神は何を教えようとされているのでしょうか？

### 1. タラントを預けた主人と預かったしもべとの関係

3人のしもべにはそれぞれ5タラント、2タラント、1タラント預けられました。5タラント預かった者はそれを2倍の10タラントに増やし、2タラント預かった者はこれも2倍の4タラントに増やし、この2人は主人から清算した時に主人から最上級とも言えるぐらい褒められたのです。しかし、1タラント預かった者はそのまま土の中に隠しておいたので当然ですが増えも減りもしないまま主人に返そうと差し出しました。その彼に対しては主人は「悪いなまけ者のしもべだ」と叱りつけられたのです。どうしてこのような結果となったのでしょうか？ 1タラント預けられた者は他の2人に比べて少ない額しか任せてもらえなかったからへそを曲げたのでしょうか？ しかし少ない額でやっかむと言っても1タラント預かって、持っているのが怖くて土に隠しているわけですからもっと多いともっと怖くなります。ですから額の問題ではありません。違いの決め手となったのは、それよりも主人をどのような人としているのかということではないでしょうか？ この主人とは神様のことでですから神様をどのようなお方として見ているのか、あるいは自分の中に映っているのか、その違いが大きいのではないのでしょうか？ つまり、5タラント、2タラント預かった者は「ご主人は自分を信頼して、莫大な財産を委ねてくれた。遠いところに主人は旅に出るわけだから、それこそ持ち逃げすることも可能だし、散財することだって出来る。でもご主人は私を信頼して預けてくれた。つまり、愛してくれた。だから、信頼してくれた人のために頑張ってその人が喜んでくれる顔をみたい」こういうことだったと思います。再びご主人と会った時20節、22節を読むと、嬉しそうにご主人に報告している様子が想像できます。これも主人が財産を委ねる時に「今度会う時には倍にしておくように」とか「倍になっていると嬉しい」といった条件をつけるとそうならなかったと思います。「この喜びをお前たちと分かち合いたい」と言っていることから彼らの自主的な働きによるものであることが分かります。それに比べて1タラントの者はどうでしょうか？彼にとって、

ご主人はずいぶんと厳しい人と映っているようですね。24 節の「蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集める」つまり自分が利益を得るためには無理難題を押し付けるひどい人だと映っているんですね。しかも「ひどい方だとわかっていました」とは勝手な言い分です。主人の何を分かっていたのでしょうか？主人はそんな厳しくひどい人なのでしょうか？ この主人はお金を預けただけです。しかし違う結果となったのはこの主人の問題ではなく預かった者が独自に持っている主人のイメージです。この主人は神様のことであると言いました。タラントとは私たちに委ねられた賜物です。それを活用するという事は奉仕をするということであり、奉仕をするということは神様に仕えること、従うということです。人は愛してくれる者のためには従うことは全く苦になりません。しかし、自分本位で従えという人に従うのは苦痛以外の何物でもありません。私たちにとって神様はどのようなお方として映っているのでしょうか？ もし奉仕することが苦痛であったり、人が気になるとしたら自分の動機を点検する必要があるかもしれません。

E. H. ピーターソンは「従順さとは、恐れではなく愛に根ざすものです。強いられて従順さが増すわけではなく、愛されることによって心から従順になるのです。キリスト者にとって神の戒めを守るとするのは、いやいやながら規則に従うようなことではなく、喜びにあふれた愛の実践なのです。」と言っています。

## 2. 用いられるタラント

5 タラント、2 タラント預かった者はそれを活用して倍にしました。あとで1 タラントの人に主人は土の中に埋めておくぐらいだったら銀行に預けておくべきだったと言われるように当時も銀行のような仕事がありましたし、また株式こそ無いものの投資活動はあったようです。もちろん商売もなされてきました。それでも多額のお金を倍にするというのはなかなかすごいことですね。今は銀行にどれだけ預けていても殆ど増えませんからね。しかし、この主人が帰ってくるまでどれぐらいの期間がたったのでしょうか？19 節には「よほどたってから」とあります。一カ月やそこらではないでしょうし、主人も預けた財産が活用されることを思っていたことでしたら相当な時間が必要ということも分かっていたと思います。そしてご主人が帰ってきて彼らを褒められた時のことばは「よくやった。良い忠実なしもべだ」ということでした。「よくやった」というのは原文では短いユーということば一言です。あなたのユーではありません。これはほぼ感嘆符！「やったね」「素晴らしいね」というニュアンスです。主人の嬉しそうな思いが伝わってくるようです。そして続く「忠実なしもべ」とはどういうことでしょうか？ 忠実などは信仰深いということばが使われていますが「しもべ」と合わせて、忠実なしもべとはいつも主人あつての自分、心から主人を信頼しているしもべということです。どんな時にも神様との愛と信頼のつながりの中にいる。そういう人が忠実なしもべと呼ばれるのです。

ところで 2 人のしもべは預かったお金で商売して倍の額にしました。確かに大変なことと言えば大変です。しかし、この箇所のこと、ある以前経営コンサルタントをしていたクリスチャンの方はこんな風に言っていました。例えば複利で年利 5% なら 15 年あれば倍になります。つまり 1 万円を一年かけて 1 万 500 円にしてください。と言われるとちょっと頑張れば出来るように思いますし、さほど大きなプレッシャーとを感じる人はいないと思います。そして年利をこのペースで 15 年繰り返すと何も補填しなくても 2 倍を超えるというのです。ですから 2 人の人がタラントを倍にしたということも夜も寝ないで汗水たらしてと必死にならなくても達成することは可能なことかも知れません。ただし無理はせずともコツコツと絶え間なく続けてゆくことが大切ですが。みことばに「勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。」ローマ 12:11 とあります。

また 5 タラントの者にも 2 タラントの者にも主人がまったく同じ誉め言葉を与えていることから賜物が用いられるというのは賜物の種類が多いとかどれだけ出来るかという量の問題ではないことが分かります。つまり人と比べるようなものではなく、あなたに与えられた賜物を用いることにどれだけ誠実に取り組んでいるかということが大切だということです。

### 3. 天国につながるこの世の歩み

預けた主人はよほど経ってから、帰って来て、彼らと清算をします。これは例外なく私たちはこの地上の生涯を終えた後、神様の前に私の人生が全てさらけ出され、チェックを受けるということです。清算とはそういうことですね。一円でも多ければ黒字、一円でも少なければ赤字でアバウトなことはありません。それは清算ではなく概算です。ただ神の前にさらけ出されたら誰一人堂々と天国に行ける者がいないから主イエス・キリストが十字架にかかれたわけです。しかし今日のたとえ話の文脈は救いのことというより、神が一人一人に与えて下さった賜物を神様を覚えて忠実に用いるということです。その線に沿って考えます。

清算した時に主人は 5 タラント儲けた者にも、2 タラント儲けた者にもまったく同じことば 21, 23 節をかけました。少し目を留めたいのですが主人は「あなたは、わずかな物に忠実だったから」と言いました。最初に言いましたようにタラントというのは大きな貨幣単位です。1 タラントと言えば 16 年分の年収です。主人は皮肉で言ったのでしょうか？ そんなことはありません。ここでは天国の豊かさが意味されているのです。この地上でどんなに莫大な財産であっても、天国で受けるものからするとそれはわずかな物であるということです。そうすると続けて言われた「わずかな物に忠実だったから、次にあなたにたくさんのお金を任せよう」ということも、次にもっと大きな事業を任せようということではなく、天の御国においてはもっと豊かなものを受けるということになります。ですから私達のこの地上における神が与えて下さった賜物、それは財に限らずありとあらゆるもの、それこそ自分自身の存在をも、どのように忠実に、それは神様とのしっかりとしたつながりの中で用いられてゆくかが問われてゆくのです。

よく地上の礼拝は天国で神を礼拝するためのリハーサルだと言われます。少しでも神が崇められる素晴らしい礼拝を共に捧げるために心を一つにしたいと願います。そして御心になつた素晴らしい礼拝を捧げ、そこに神の与えて下さっている恵みを感じる事が出来たら、やがていつの日か天の御国において捧げる礼拝の素晴らしさがより分かると思います。タラント（賜物）は神様の素晴らしさを表わすために私たちに神様が与えて下さったものです。賜物があること、賜物を持っていることが素晴らしいわけではありません。少しでも神の栄光を表わすために用いられることが大切です。そして今日の主人が「お前も共に喜んでくれ」と言ったように神が褒めたたえられ、御名が崇められる時に、私たちの心にも喜びが訪れるのです。この世は少しばかりの自己達成感、存在感を満たすために必死になっています。またプライドが傷ついた、つかないでいがみ合いが起きます。主は「そんなことのためにタラント（賜物）を与えたのではない」と言われているのではないのでしょうか？ 神を礼拝するために私たちは造られ活かされています。タラントが用いられ神の栄光が表れる礼拝をコツコツと目指しましょう。